Japan Information-Culture Society

研究論文

脱－理想化されたヴァーチャル・コミュニティ
――その変容をめぐる政治哲学的考察――

The De-Idealized Virtual Community

山本　圭　Kei YAMAMOTO
名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 国際多元文化専攻 博士課程
Doctoral Course, Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University

要　旨

本稿が目指すのは，今日「ヴァーチャル・コミュニティ」と名指されるオンライン上での人々の集まりを政治理論的観点から分析することである。そもそも人々の共生のあり方である「コミュニティ」はこれまで，政治学や社会科学の領野で議論されてきたものであるが，そこで論じられてきたコミュニティは果たして，今日の「ヴァーチャル・コミュニティ」とどのような関連性を持つのであろうか。ヴァーチャル・コミュニティをそのような連関のなかで分析するとき，われわれはそれをめぐる言説の変化に気付かざるを得ない。すなわち，ヴァーチャル・コミュニティの登場ははじめ，理想のコミュニティを実現するものとして歓迎されたが，次第にそれが抱える限界が明らかになるにつれて，その期待は萎みつつあるということである。このようにヴァーチャル・コミュニティが変容するなかで，コミュニティとしてのどのような特質が失われたのかを政治哲学，特にハンナ・アーレントの権力概念に依拠しながら明らかにしたい。ヴァーチャル・コミュニティへの政治哲学からの眼差しは，これまで十分には検討されてこなかった問題を浮き彫りに出来ると考える。

Abstract

This paper focuses on the online-assembly called “virtual community” and analyzes it from perspectives of political theory. “Community” is a name of the way to co-exist and has been mainly considered in the fields such as political thought and social sciences. Therefore, I would like to examine the relationship between “community” and “virtual community.” This analysis also makes it clear that there is a distinct transformation in the discourse of virtual community. That is to say, when virtual communities appeared for the first time, they were expected to become as ideal communities by many people. However, as its limitations became gradually apparent, the expectation began to fade. By applying the conceptions of political philosophy, especially focusing on Hannah Arendt’s notion of “power,” I would like to clarify what characteristic virtual community has lost through this change.

1．はじめに

1．1　本稿の問題意識と目的

イギリスの歴史家，エリック・ホブズボームは，1973年以後の20年が「危機の時代」であったとし，そのあいだを，世界が方向感覚を失い，不安定と危機にすべり込んでいく歴史として捉えている。そして，その時期についての次のような時代診断は，われわれが今日のコミュニティについての考察をはじめるための重要な出発点を与えてくれるように思われる。

> 「コミュニティ」という言葉―「知的なコミュニティ」，「パブリック・リレーションズ・コミュニティ」，「ゲイ・コミュニティ」等々―がこの時期ほど無差別かつ内容空虚に用いられたことはなかったが，まさにその時期，社会学的な意味でのコミュニティは現実の生活の中で見つけ出せなくなっていたのである[1]。

ホブズボームのこの指摘は，政治，経済，文化などの複数の領野におけるグローバル化のために，従来的な国民国家が弱体化し，ますます脱領域的な活動が中心になりゆく時期に向けられている。もちろん今日においても，このグローバリゼーションの勢いはとどまることを知らないだけでなく，情報通信技術が多くの人々へ普及していることも相俟って，ホブズボームのコミュニティについての言葉はますます的を射たものになろう。確かに現代社会のなかでは，ある一定の領域に限定され，その構成員が互いによく知る存在であるというようなコミュニティはもはや存在しないか，あるいは少なくとも減少しつつあることは間違いのない事実である。

しかしながらそれは，コミュニティを従来の社会学的，もしくは人類学的に捉えた場合にのみ正しい。そもそも社会学の領域からコミュニティが考察される場合，えてしてそれは「すでに失われたもの」としてか，あるいはいつの日か「来るべきもの」として捉えられるのが常であった。たとえばジーグムント・バウマンが，コミュニティは「失われた楽園の異名である」[2]と述べているように，社会学者の眼に映るコミュニティとは近代社会の到来が押し流してしまった，古きよきローカルな人々の関係性を基盤にするものなのであり，その意味でそこには，いつもすでに，「いま・ここになきもの」という定義が含まれざるをえない。

しかしながら今日，ホブズボームが「危機の20年」と呼んだ時期が過ぎ去った頃から，新たに「コミュニティ」と名指されるものが現われ，多くの関心を集めている。それが「ヴァーチャル・コミュニティ」である。「ヴァーチャル・コミュニティ」とは言うまでもなく，特定の場所に限定されず，オンライン上での共通の関心を持つ人々の集まりを指しており，比較的早期

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

の段階からこの「ヴァーチャル・コミュニティ」に注目し，これについての纏まった書物を著したハワード・ラインゴールドは，ヴァーチャル・コミュニティを次のように定義している。

> ヴァーチャル・コミュニティとは，ネットから生成する社会的な総和で，ある程度の数の人々が，人間としての感情を十分にもって，時間をかけて公的な議論を尽くし，サイバー・スペースにおいてパーソナルな人間関係の網をつくろうとしたときに実現されるものである[3]。

ホブズボームの言う「社会学的な意味でのコミュニティ」がもはや失われてしまったとすれば，われわれはこの新たなコミュニティをどのように考えればよいだろうか。オンライン・コミュニティという新たな現象が，多くの研究者の関心を集め，様々な観点からその諸特徴が分析・記述され，多くの成果をおさめていることは言うまでもない。しかしながら，「コミュニティ」，もしくは「共同体」という人間集団の存在様態は，これまで主に政治学，社会科学の領野で議論されてきたものにもかかわらず，同じくその豊穣な議論の蓄積が，今日のヴァーチャル・コミュニティの分析に活かされているとは言いがたい状況にあることも事実である。

したがって本稿の目的は二つある。第一に，これまで主に社会学や心理学の分野で言及されることが多かったヴァーチャル・コミュニティを，政治理論，あるいは政治哲学の観点から考察することである。政治学的に極めて重要な関心事である「コミュニティ」と，今日の「ヴァーチャル・コミュニティ」を比較・分析することによって，オンライン・コミュニティの特質を明らかにする。

ヴァーチャル・コミュニティをそのような連関のなかで分析するとき，われわれはそれをめぐる言説の変化に気付かざるを得ない。すなわち，ヴァーチャル・コミュニティの登場ははじめ，理想のコミュニティを実現するものとして歓迎されたが，次第にそれが抱える限界が明らかになるにつれて，その期待は萎みつつあるということである。したがって，本稿の第二の目的は，このようにヴァーチャル・コミュニティが変容するなかで，コミュニティとしてのどのような特質が失われたのかを，政治哲学の立場から明らかにすることである。ヴァーチャル・コミュニティへの政治哲学からの眼差しは，これまで十分には検討されてこなかった問題を浮き彫りに出来ると考える。

1.2　本稿の構成

本稿の構成は次の通りである。まず第二節において，政治理論や社会科学の分野における代表的な議論を参照することで，これまで「コミュニティ」がどのように捉えられてきたかを考察する。

第三節では，ヴァーチャル・コミュニティの性格と特質を分析的に記述し，その問題点を探ると同時に，ヴァーチャル・コミュニティをめぐる言説の変容に着目する。

第四節ではそのようなコミュニティ観の変化のなかで失われたものを，政治理論の概念を用いて検討する。ここで注目したいのが，20世紀を代表する政治理論家ハンナ・アーレントが唱えた「権力」の概念である。アーレントの権力概念の特異性を，他の理論家との比較を通じて明らかにし，この概念をヴァーチャル・コミュニティの分析へと応用したい。

2.　コミュニティについての理論的考察

2.1　テンニエスとアーレント

まず伝統的な人文諸科学の領域で，これまでどのようにコミュニティが考察されてきたかを確認する必要がある。コミュニティについて考察したものとしては，古くはプラトンやアリストテレス，また近代ではルソーやヘーゲル，プルードンからマルクスにいたるまで枚挙に暇がない。もちろんこれら全てを扱うことは不可能であるし，そもそもそのようなコミュニティの通史を描くことが本稿の目的ではない。それゆえ本節ではまず，ジェラード・デランティに「多様な解釈が可能で，事実上すべてのコミュニティ研究がこの本と関連づけて自らを規定した」[4]と評される，フェルディナント・テンニエスの代表的著作，『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト *Gemeinschaft und Gesellschaft*』を取り上げることにする。近代社会学の代表者であるテンニエスの議論を参照することは，「コミュニティ」という語に込められた意味をもっとも端的に示してくれるだろう。

テンニエスの議論の前提は，家経済から商業経済へ，農業の支配的な段階から工業の支配的な段階へと社会が発展するなかで，人々の共同生活のあり方が決定的に変化を蒙ったということである。テンニエスの用語法で言えば，近代化の過程において，「ゲマインシャフト」は「ゲゼルシャフト」へと席を譲ったということになる。ここでいう「ゲマインシャフト」とは，血縁共同体や地縁共同体のように，「自然的な」結びつきということ以外には何ものにも媒介されないような人々の関係を指しており，一方「ゲゼルシャフト」は，利益社会のように，人々が商品や貨幣の自分の取り分をめぐって，少なくとも潜在的にはつねに敵対関係にあるような機械的・抽象的な社会を指す。また，前者が無条件で返礼を期待しない純粋な贈与にもとづいているとすれば，後者の場合は，自分の与えたものと少なくとも同等であると考えられる返礼と交換でなければ，他者のために何かを為したり給付したりすることもない。したがって，前者においては，人々の関係は相互に強く結びついているのに対し，後者においてそれは分離しているか，あるいはより希薄なものになっているということが出来る。本稿の関心に則して言えば，ゲマインシャフトは（失われた）コミュニティであり，人々の伝統的な慣習や宗教のような共同性に根ざしているが，ゲゼルシャフトはそれを破壊するアトム化された個人から成るモダンな社会形態―テンニエスにとって，とりわけ国家はその代表である―であるということが出来よう。テンニエスはこう述べている。

> 民族性とその文化が保たれるのは，むしろゲマインシャフト的な生活・秩序においてである。したがって，国家性―この概念によってゲゼルシャフト的状態を総括することができよう―は，それが民族性から離脱して遠ざかる程度に応じて，このゲマインシャフト的な生活・秩序に憎悪・軽蔑感をもって対立する〔…〕[5]

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

このように，近代にいたって社会形態がかつてのコミュニティから，経済的な結びつきによる社会へと変容したという見方は，政治理論家として有名なハンナ・アーレントも共有するところである。

アーレントによれば，古代ポリスにおいてははっきりと峻別されていた公的領域／私的領域の区別は，近代の勃興とともに消滅した。古代ギリシア人にとって公的領域の存在は，政治活動が営まれるコミュニティとしての機能を果たしていたが，それは「私的なもの the private」――より具体的には，以前は私的な関心事に過ぎず，政治のそれとは考えられていなかった経済（家政）――に飲み込まれてしまう。この肥大した私的なものをアーレントは「社会 society」と呼ぶのであり，失われたコミュニティへの郷愁が彼女にも見られることは否定できないであろう。

とはいえ，アーレントが捉えたコミュニティが，テンニエスのそれとは幾分異なっていることは付け加えておく必要がある。すでに述べたように，テンニエスのゲマインシャフトには，民族的な同一性に大きく依るところがあった。それに対してアーレントが見た公的領域は，そのような同一性を拒否し，むしろ根源的な多様性が実現される場に他ならない。彼女は次のように述べている。

> 自分自身の意見を主張することは，自分自身を開示し，他者に見られ，聴かれることが可能になることを意味している。ギリシア人にとってこのことは，公的な生活に付随した一つの偉大な特権であったのであり，人が他者に見られたり聴かれたりしない家政の私的領域には欠けていたものなのである[6]。

彼女はこうして可能になる人々の多様性を「複数性 plurality」[7]と表現している。つまり，政治的な領域において自らの意見を他者に向けて発信することこそ，彼女がポリスというコミュニティに見出したものなのである。そこには他者との共同こそあれ，いかなる強要も存在し得ない。

テンニエスとアーレントの議論を次のようにまとめることができよう。すなわち，人々が集まり，伝統や徳を共有したかつての理想的コミュニティは近代の産業化のなかで破壊されてしまった。いまやゲマインシャフトはゲゼルシャフトへと置き換わったのであり，そこでかつての紐帯を喪失した人々は個人化，大衆化されており，そこにアーレントが「複数性」と呼んだような契機はもはや存在しなくなったということである。

このようなコミュニティ観は，現代のコミュニタリアンと呼ばれる人たちの個人主義批判にも通じている。われわれは次に，現代政治理論のなかでコミュニティがどのように扱われているかに着目したい。

2.2　コミュニティをめぐる現代の議論

前世紀末に起こったリベラリズムとコミュニタリズムとの論争は，今日のコミュニティを考察するさいに欠かすことのできないものである。まずこの論争の中心となったリベラリズムの論客，ジョン・ロールズの議論を見てみよう。1971 年に刊行された彼の代表作『正義論』のプロジェクトは，どのような条件において人が，功利主義に陥ることなく「公正としての正義 justice as fairness」の原理を選択，合意することができるかを示そうとするものであるが，ここでは本稿にかかわる限りでロールズの議論を整理する。

まずロールズはそのような条件を可能にするための装置として「原初状態」というフィクションを導入する。「原初状態」において個人の経験的な諸属性，たとえば性別，階級，あるいは所得や性格などは，いったん括弧に入れられたものとして構想される。これは，そのような偶然的な要素が正義の原理の選択のさいに影響することを防止し，公正さにのみもとづいた選択を可能にするためのものであり，彼の有名な「無知のヴェール」とはこの状態を担保するために導入された設定である。ロールズはこう述べている。

> すべての者が同様に状況づけられており，誰も自分の特定の状況に都合がよいように原理を立案できないために，正義の原理は公正な同意と取引の結果となる[8]。

このような条件下ではじめて諸個人は，どのようなルールが正義にかなっており，それゆえ万人が合意できる正義の原理かを選択することが可能となるのである。

またロールズの正義論は，「正しさ」の「善」への優位によって特徴付けられている。すなわちロールズにとって，何を善きこととみなし，人生において追求されるべきかは個人によって千差万別であり，「これこそが」という絶対的な善は正義の原理には不要である。それに対して，正義はそのような善の抗争を調停するものであり，いわば諸価値の裁定者に相当する。善に関しては意見の一致を見ることが出来ないとしても，諸個人はその手続きの公正さについて，その正義を認めざるを得ない。

このようなロールズの構想に対しては，コミュニタリアンと呼ばれる人びとから多くの批判が起こった。まずマイケル・サンデルは，ロールズの「原初状態」という設定に異議を唱えている。ロールズの原初状態において主体は，いかなる経験的な属性も剥奪されており，それゆえその主体は個人主義的なものである。そのような個人の自我は，経験的なものの影響にさらされずに，自我の自己同一性がはっきりと固定されていることになる。サンデルにとって問題なのは，このようにいかなる経験的な条件や，その個人が属する共同体の影響に先行する主体という設定に他ならない。

> 〔…〕公正としての正義は，われわれの共同性を真剣に考えることに失敗している。自我の境界が優先し，断固として固定されているとみなされることによって，われわれの共同性は，善の一側面に格下げられ，善も単なる偶発性に，つまり「道徳的見地からは適切ではない」，見境のない欲望や欲求の所産に格下げられている。もしこのように，減少させられた善の概念があるとしたら，正の優先は，実際に例外を許さない要求となるであろう[9]。

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

サンデルによれば，主体におけるコミュニティ感覚の軽視は善の格下げをもたらす。これはロールズの善に対する正の優位への批判をも含んでいるが，これについては同じくコミュニタリアンと目されるアラスデア・マッキンタイアによっても批判されるところである。マッキンタイアは近代的個人主義を徹底的に批判しながら，個人は所属する共同体に埋めこまれていると考える。マッキンタイアによれば，善，もしくは道徳の源泉は自らがその成員である共同体なのであり，そのような伝統や文脈から切り離された個人は，善そのものを求め，徳を実践することが決してできないのである。

> 〔…〕私は，私の家族，私の都市，私の部族，私の民族の過去から，様々な負債と遺産，正当な期待と義務を相続しているのである。ある程度このことが，私の人生にそれ自身の道徳的特異性を付与するのである[10]。

リベラリズム・コミュニタリズム論争を概括することによってわれわれは，次のように言うことができるだろう。すなわち，コミュニタリアンの個人主義批判によれば，個人は彼/彼女が所属するコミュニティから完全に独立して存在しているわけではない。そうではなく，サンデルの言葉を再び用いれば，個人は「根源的に状況づけられた」もの以外にありえないわけであり，そのような状況においてのみ，個人は様々な属性や人格，あるいは善の概念や道徳を持ちうるのである。もちろんこのような主体の間主観的次元を強調するのは，現代のコミュニタリアンに限ったことではない。しかしながら今日このような論争が再び起こっていることは，コミュニティの重要性が再認識され，そして実際に多くの論者からその復権を求められていることを示している。われわれはこれらの議論のなかに再び，「失われたものとしてのコミュニティ」への郷愁を見出すのである。

3. ヴァーチャル・コミュニティ

3.1 理想のコミュニティ

ここで一度われわれは政治理論の議論を離れ，今日の「ヴァーチャル・コミュニティ」の基本的な特徴を確認しておきたい。第一に，テンニエスにとってテクノロジーの発展は，コミュニティの破壊をもたらしたものであったが，逆説的にも今日のオンライン・コミュニティはなによりもまずテクノロジーを媒介して成立する。また，コンピューターに媒介されたコミュニケーション（CMC）が，個人と個人のあいだで行われることも，今日のテクノロジーがもたらしたものとして特徴的である。インターネットの登場とその普及は，人々のコミュニケーションを空間的な束縛から解放し，いまや個人はネットワークを通じて，世界中どこの人とも繋がることが，少なくとも技術的には可能となった。

また，ヴァーチャル・コミュニティに参与する主体が個人化されるということは，彼/彼女の帰属が無意味化することをも意味している。彼らがオフライン上でどのような集団に所属していようが，そのことは少なくともオンライン上においては棚上げされる。しかもこのことはもちろん，肌の色や性別，そのほかの身体的特徴にもあてはまる。オフライン上において自由なコミュニケーションを阻害しがちなこれらの要素が，ヴァーチャル・コミュニティにおいて重要視されることはない。オンライン上では，自ら明らかにすることがない限り，自身の本名を伏せておき，「ハンドルネーム」を用いることも当たり前のことになっている。このような匿名性というネットの特質が，オンライン上での「気楽な」コミュニケーションを支えていると言えよう[(1)]。さらに，インターネットのこのような特性が，オフラインでは発言力をあまり持たない人や，身体的に不利な立場に立たされることの多い人のエンパワメントとなる点も注目されている。こうして，オンライン上に共通の関心を持って集まる人々は，みな平等に発言権を持ち，自分の考えを自由に伝達することが容易になったのである。

ヴァーチャル・コミュニティのこれらの諸特徴ははじめ，多くの人々によって歓迎された。すなわち彼らは，このようなコミュニティの誕生が，人々の自由なコミュニケーションの，あるいは関係性の新たな可能性を開くものと思われたのである。ラインゴールドはこのようなコミュニティの出現を，「私たちの実生活からはインフォーマルな開かれた交流スペースが次々消えゆくなかで，世界中の人々の胸のなかで膨らみ続けるコミュニティを求める渇望が生んだもの」[11]と表現している。また，マイケル・ハウベンとロンダ・ハウベンはグローバルな規模でネットワークに接続された人々を「ネティズン」という新たな市民のあり方として提示し，その期待を次のように述べている。

> ネティズン達は決まって，親切で友好的です。〔…〕ザ・ネットの社会は，知的な活動を歓迎するという点において，オフラインの社会と異なります。誰もが自らものを考え，意見をザ・ネット上に公開することを求められます。〔…〕ザ・ネットのユーザーの一人一人が，特別で，役立つ存在であるという役割を担うことができます。それぞれの利用者が，独自の意見や関心を持つということが，ザ・ネットに専門性の高い知識を与えるのです。それゆえ，一人一人のネティズンもザ・ネットにとって有益で，特別な資源となるのです。それぞれの利用者が，ザ・ネットの知的・社会的価値や可能性全体に貢献しているのです[12]。

あるいはわれわれはここに，代表的ヴァーチャル・コミュニティ“The Well”の理事会のメンバーでもある，ジョン・バーローの有名な「サイバー・スペース独立宣言」を付け加えてもよいだろう。この宣言はオンライン上の猥褻情報を規制する「通信品位法」に反対してなされたものであるが，そこでバーローはサイバー・スペースの徹底した独立を主張する。

> われわれが創りつつある世界は，すべての者が，人種や経済力や軍事力，あるいは生まれによる特権や偏見を持つことなく入ることが許されるものである。われわれが創りつつある世界では，だれでもどこでも，いかにそれが特異なものであれ，沈黙や服従を強制される恐れなしに，自らの

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

信念を表明することができるのだ[13]。

このような熱狂と期待のなかで，かつては政治学者や社会学者によって考えられてきた「コミュニティ」も必然的にその意味を変えることになる。バリー・ウェルマンは，新たなテクノロジーの出現が，どのように人々のコミュニケーションのあり方を変容させたかを段階的に検討した論文のなかで，「コミュニティ」を次のように定義している。

> 私は「コミュニティ」を，社交性，支援，情報，所属の感覚，そして社会的アイデンティティを提供する個人間の結びつきのネットワークと定義する。私は，コミュニティについての自分の考えを，隣人や村落に限定しない。これはいかなる時代にもよい勧告になり，そしてとりわけ，21世紀には的を射たものである[14]。

ウェルマンによるこの定義にはすでに，かつての「コミュニティ」が内包していた「地域的共同体」という要素は含まれていない。本稿の議論に即して言えば，あたかもテンニエス的な血縁的共同体が徹底的に駆逐された結果，代わりにアーレントが古代ポリスに見た，失われたはずのコミュニティがわれわれの時代風にアレンジされた「理想的な」形において回帰したかのようでもある。

ヴァーチャル・コミュニティのこのような認識はまだ，われわれが第二節で見たようなコミュニティ観と部分的に繋がっている。部分的というのはつまり，オンライン・コミュニティは本性上，現実的な場所に強く結びつけられたものではないものの，集まった人々は相互に信頼関係を築きあげ，互いの意見や情報を交換し合うといった意味においては変わらないからである。そして，そのネットワークが人々のアイデンティティの重要な要素を提供するという点においても，現代のコミュニタリアンの考えと通底している。それゆえ，オンライン上での人びとの集まりが「コミュニティ」と名指されることはある意味では当然のこととも言える。

しかしながら今日においては，ヴァーチャル・コミュニティが真に理想的なコミュニティを実現しうるというような熱狂は，幾分沈静化したように見える。今日，ヴァーチャル・コミュニティに言及する多くの研究者はもはや，そのような希望を抱いていない。それゆえわれわれは次に，そのようなヴァーチャル・コミュニティについての「醒めた」議論を扱うことにする。

3.2　脱理想化されたヴァーチャル・コミュニティ

ヴァーチャル・コミュニティが出現したとき，それが性別や年齢，あるいは肌の色など，つまりは身体的な表象が問題とされず，それゆえにこそ「純粋な」言論のみにもとづいた，自由なコミュニケーションが可能になるとして迎えられたことはすでに述べた。しかしながらこのような考えにはすでにいくつかの疑義が唱えられ始めている。たとえばゴードン・グラハムは，われわれのコミュニケーションが言葉によってだけで成り立つのではなく，身体的なジェスチャーや仕種，外見などもが重要な役割を果たすことに注意を促している。グラハムによれば，所属や身体的な諸属性を抜き取られた「純粋な精神」だけの存在は，「貧困化された人間 impoverished person」に他ならない。そのような脱身体化された「幽霊」たちのコミュニティは，結局のところ「コミュニティの二流の形態」でしかない[15]。

また，サイバー・スペースにおいては，人種や性差が重視されないということにも疑問の声が挙がっている。バークハルターの研究はこの点で興味深いものである。それによれば，オフライン上では，人種に対する偏見は，実際のその人とのやりとりの中で修正されていくのが通常であろうが，しかしながら，オンラインでの結びつきは，そのような修正の機会をほとんど与えない。人種への偏見に基づいた意見がそのままやり取りされる結果，今度はそのような偏見のほうが逆に，現実の人種アイデンティティに影響を与えてしまうことがあるという[16]。これらの研究は，オンライン上でのコミュニケーションのやりとりが現実の生活と完全に切り離されたものとしては存在し得ないことを示唆していよう。

さらに，インターネットに接続する主体はそもそものはじめから個人化されているにもかかわらず，共通の関心や趣味などを媒介にした，ある種の互恵的な共同体を実現することができると考えられていたわけだが，そのような見知らぬもの同士のコミュニケーションそのものを強調するコミュニティ観は次第に失われつつあるように思われる。言い換えればこれは，オンライン・コミュニティの存在を道具主義的に捉える見方が強まっているということでもある。ここで道具主義的とはたとえば，オンライン上の交流自体を目的とせず，ただ必要な情報収集のために「掲示板」や「コメント欄」を読むような傍観者的な利用の仕方を指しており，そこでは参加者同士のいかなる親密な関係や信頼関係も特に必要とされないことは言うまでもない。それゆえ，「私が情報を提供する相手は，私を直接助けてくれる立場にはあり得ないかもしれないが，それでも他のだれかが私を助けてくれる可能性はある」と述べるラインゴールドのような「お人よし」は，ヴァーチャル・コミュニティにとって以前ほど重要な態度とは見なされない。

ヴァーチャル・コミュニティに集まる人々が，互いのために尽力することをやめ，個人主義的傍観者になるにつれ，そこに存在することを期待された共同性も次第に消滅していく。それゆえ，マーク・A・スミスとピーター・コロックが「ほとんどのオンライン・グループの構造はアナーキーであるか，独裁的であるかである」[17]と述べることも致し方ないことかもしれない。ヴァーチャル・コミュニティのこのような認識は，かつて想い描かれていた人びとの共生のヴィジョンとしての「コミュニティ」とあまりにもかけ離れてしまっている。

これらの事実は，「ヴァーチャル・コミュニティ＝理想的コミュニティ」というこれまでの図式の修正をわれわれに迫る。クレイグ・キャルホーンによれば，インターネットを通じたコミュニケーションは結局のところ，そのほとんどが友人間や家族間など，すでにオフライン上である程度の関係を築いている者同士に限定されることを指摘し，「ヴァーチャル・コミュニティ」という呼称はある意味で大袈裟（overstatement）であ

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

ると述べる。

> インターネットは，とても便利な道具ではあるが，それを用いた活動の力は，いまだおおかたローカルなものに基礎を持っている。つまり，インターネットが最も有効なものになるのは，その外部で組織された人々の能力に付け加えられる場合であって，現実のものを「ヴァーチャル・コミュニティ」によって代用する場合ではない[18]。

インターネットは現実には不可能に思われた理想を実現するどころか，その代用にもなりはせず，それが果たす役割は，現実の諸関係やコミュニケーションを補完するツールとして考えられるべきである，キャルホーンはそう唱えている。このようなキャルホーンの議論を受け，デランティは「ヴァーチャル・コミュニティという発想については，何かまったく新しいものの創出というよりも，非常に多様な社会的帰属形態の表現に対して可能性を提供する情報通信技術のインパクトという，もっと分化した見方にトーンを弱めるべきである」[19]と主張するのである。

さらにここでは，アルバート・ボルグマンによるコミュニティの三つの分類を参照しておくことが，われわれの理解を助けてくれるだろう。ボルグマンはコミュニティの種類を「道具的コミュニティ instrumental communities」，「最終のコミュニティ final communities」，そして「商品化されたコミュニティ commodified communities」に分類している。「道具的コミュニティ」とは，前述の個人主義的に利用されるコミュニティ観と一致しているため，ここで再述する必要はないだろう。

次に「最終のコミュニティ」とは，手段というよりもむしろ，目的としてのコミュニティであり，その構成員であることがその人にとっての「生きる理由」となるようなコミュニティを指す。ボルグマンがここで想定しているのは，家族や恋人，親しい友人とのつながりであるが，ここで重要なことは，この「最終のコミュニティ」にはリアリティや，人間の身体的現前が不可欠であるということである。それゆえボルグマンにしたがえば，サイバー・スペースにおいてこの種のコミュニティを実現することは不可能となる。

最後に「商品化されたコミュニティ」であるが，ボルグマンによれば，インターネットはその本性上，あらゆるものを商品化するものである。それゆえヴァーチャル・コミュニティに参与する主体もまた，あらゆる現実世界の属性を剥奪されることによって，魅力的な人格へと変貌するのであり，ボルグマンはこれを「自己の商品化」と呼んでいる。しかしながら，ヴァーチャルな自己のこの魅力は褪せ始めていると彼は指摘する。というのも，エレトロニックで脱身体化されたコミュニケーションは結局のところ倦怠感を惹き起こすからであり，したがって，ボルグマンは次のように結論する。

> まったくインターネットは，中心的ではないにしても，引き立て役として最終のコミュニティの役に立つ。それは，意義と充足のコミュニティの必要条件を際立たせるためのバックグラウンドを提供してくれる[20]。

われわれは今日のヴァーチャル・コミュニティ観を概観してきたが，いまや，そこに抱かれた期待が消え去りつつあることは明らかだろう。かつて人々の理想的な共生のあり方に付された「コミュニティ」はいまや，脱－理想化され，日常の人間関係を補完するものとなった。「コミュニティ」という名は変わらずとも，ここに見られる変化は明らかだろう。すなわちヴァーチャル・コミュニティが熱狂的に歓迎されたとき，そこにはテンニエスのゲマインシャフトにおけるような人びとの互恵的関係，アーレントが公的領域にみた他者との自由なコミュニケーション，あるいはラインゴールドや，ハウベンらが初期のヴァーチャル・コミュニティについて述べた匿名の他者への配慮など，コミュニティに不可欠とされた諸要素が存在していた。しかしながら，日常の人間関係を補填するツールとなった今日のオンラインでの集まりには，そのようなものはもはや存在しておらず，それゆえこれが，いまだ「コミュニティ」と呼ばれることには，いかなる必然性もないと言えよう。われわれはここに，「コミュニティ」というよりもむしろ，テンニエスがかつて「ゲゼルシャフト」と呼んだものを，あるいはアーレントが「私的なもの」の肥大化として捉えた「社会」を，そして現代のコミュニタリアンが警鐘を鳴らす「個人主義」を見出すのである。

もしヴァーチャル・コミュニティをめぐるこれらの言説が示すとおり，今日それが変容し，「理想のコミュニティ」足り得ないとすれば，われわれはこのことをいかに捉えるべきだろうか。われわれはこれが変容のなかで喪失したものを概念的に同定する必要がある。ここで提示したいことは，政治哲学の概念が，この理解に寄与するということである。われわれは次節において，ハンナ・アーレントの権力の概念に照明を当てることで，このことを明らかにしたい。

4. アーレントの「権力」概念とヴァーチャル・コミュニティ

ここで断っておきたいことは，われわれがこれまでヴァーチャル・コミュニティの変容について述べてきたことは，飽くまでそれをめぐる「言説の変容」であったということである。しかしながら本稿では，この言説における変容が，実際のオンライン・コミュニティの実情を反映していると仮定し議論を進めたい。このような次元の直線的な移行が問題含みであることは承知しているが，しかしながら本稿のように，まさに無数に存在する，あるいは存在してきたオンライン・コミュニティの特徴を概念的に抽出しようとする場合，そのような一般化/抽象化もまた不可欠な作業なのであり，そこで零れ落ちる個々のコミュニティの特殊性を吟味することは，今後の研究を俟つところである。

ヴァーチャル・コミュニティの変容を検討するために，ここで取り上げたいのは，アーレントの「権力」の概念である。ヴァーチャル・コミュニティの分析に「権力」という政治学の概念を用いることは突飛に思われるかもしれない。しかしながら，この概念を政治理論の議論から切り離し，ヴァーチャル・コミュニティの分析に応用することは，それが「変容」のなかで失ったものを概念的に把握するために最も有効であると考える。

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

ハンナ・アーレントが提出した「権力」の概念は，われわれの常識的な理解からして，極めて特異なものである。まずアーレントにとって権力とは，強者が弱者に対して自らの意図を実現するために行使するような強制力のようなものではない。アーレントが公的領域のことを，人々が意見を交換し合う政治的な領域と捉えていたことはすでに述べたとおりであるが，彼女は公的領域で行われる活動を「行為 action」と呼んでいる。権力はこの行為に密接にかかわっており，ここで彼女による定義を確認しておこう。

> 権力は，行為し語る人びとの間に現われる潜在的な現われの空間，すなわち公的領域を存続させるものである。〔…〕行為の束の間の瞬間が過ぎ去っても人びとを結びつけておくもの（今日「組織」と呼ばれているもの），そして同時に人びとの共生によって存続するもの，これが権力である[21]。

アーレントによれば，権力は単一の人間，あるいは少数者に属するものではありえず，集まった複数の人間の「あいだ」に形成されるものである。そのような複数の人間のあいだに立ち現れる権力こそが，ともすれば空虚に陥りがちな言論の空間にリアリティを与えるのであり，アーレントがそうして生み出される結びつきを人間関係の「ウェブ」と呼んでいることは示唆的であろう。

また，われわれの通常の理解では，権力は「暴力」と強い親和性があるとされる。つまり権力者は同時に，暴力手段を有するものでもあるというわけだ。しかしながらアーレントの権力観の独自性は，それが暴力と鋭く対立することにある。

> 政治的に言えば，権力と暴力は同一ではないというだけでは不十分である。権力と暴力は対立する。一方が絶対的に支配するところでは，他方は不在である[22]。

このような暴力とは峻別されたアーレントの権力概念の特異性は，例えばマックス・ヴェーバーのそれとの比較を通じてより明らかにされる。ヴェーバーにとって，権力の担い手の代表者は国家に他ならず，それは次のように定義されている。

> 近代国家とは，ある領域の内部で，支配集団としての正当な物理的暴力行使の独占に成功したアンシュタルト的な支配団体であること。そしてこの独占の目的を達成するため，そこでの物的な運営手段は国家の指導者の手に集められ，その反面，かつてこれらの手段を固有の権利として掌握していた自立的で身分的な役職者は根こそぎ収奪され，後者に代わって国家みずからが，その頂点に位置するようになった〔…〕[23]

ヴェーバーによれば，近代国家権力は暴力，あるいは暴力手段を独占することなしには成立しえない。すなわちここで権力は，暴力とほとんど同一視されていると言ってもよいだろう。権力は暴力を独占するものであるし，暴力手段を独占するものはすなわち権力者であるというわけだ。社会科学，ならびに人文科学の分野におけるマックス・ヴェーバーの仕事の甚大な影響力から考えて，彼の権力定義のインパクトが非常に大きかったことは想像に難くない。そうであればこそ，アーレントが権力を暴力から切り離したことの意義は，ますます重要性を帯びて来るのである。

しかしながら，数多存在するアーレント研究のなかで彼女の権力概念が，彼女が提出した他の諸概念と比較して，あまり言及されてこなかったこと，もしくはその概念の実効性がしばしば疑われてきたことは，それ自体注目に値する。アーレントの政治理論に大いに触発され，自身のコミュニケイション理論の一部を彼女に負っていると告白する，ユルゲン・ハーバーマスのような哲学者ですら，彼女のこの概念については懐疑的なのである。

ハーバーマスによれば，アーレントの暴力と切り離された権力概念は，実際にそれが機能し始めるや否や，政治的諸制度のうちに構造的に存在する暴力関係を隠蔽してしまいかねない。

> 構造的な暴力は，暴力としては表明されないで，むしろ，正当性にとって有効な確信が形成され育成される場のコミュニケイションを，秘かに阻止するのである。〔…〕共通確信がもつ権力によって飾られている幻想を，わたしたちはイデオロギーと呼ぶ[24]。

しかしながらわれわれは，ハーバーマスのこの批判はもっともであるといわざるを得ない。つまり，暴力とは全く対立するようなアーレントの権力概念の実効性は，「現実的には」想定が困難なのである。ともすればそれは，現実の暴力関係を隠蔽するイデオロギーとして機能しかねない。

それではアーレントのこの概念を，ヴァーチャル・コミュニティに適用した場合はどうだろうか。たとえ「現実」の政治過程においては暴力の痕跡を消去し得ないとしても，オンライン上においては，少なくとも物理的な暴力の行使は不可能であるということが出来る。それゆえヴァーチャル・コミュニティのそのような条件は，アーレントの言う権力のもっとも「純粋な」現われを可能にするのである。つまり，暴力と切り離された権力は，コミュニティを破壊するものであるどころか，コミュニティの存続を保証し，その成員同士を結びつけるものとして機能する。

このようにアーレント的権力とヴァーチャル・コミュニティの関係を捉えたとき，われわれはヴァーチャル・コミュニティがその変容のなかで失ったものを次のように概念化して把握することが出来る。すなわち，前節で述べた，ヴァーチャル・コミュニティにおける個人主義的利用は，ある意味では，インターネットの諸特性からして当然の成り行きである。ヴァーチャル空間における結びつきはそもそも「薄いつながり」であって，また，そこにどのような人々も自由に出入り出来ることが，オンライン・コミュニティでの利点でもあった。にもかかわらず，ラインゴールドが The Well で繋がる人々に対して「うちから沸いてくる強烈な信頼感」[25] を感じていたように，或いは，エスター・ダイソンが，サイバー・スペースでの人々の共同作業によって生じる「何か不思議な力を得たような感覚」[26] につい

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

て述べているように，このヴァーチャルな空間において強い信頼関係が生まれ，たとえオフライン中にあっても，彼らが相互に強く結び付くことが可能だったとすれば，それは，アーレントが「権力」と呼んだ紐帯が人々を結びつけていたと言うことが出来よう。そしてそれが変容のなかで失ったものもまた，この「権力」なのである。

5. おわりに

これまで本稿では，政治理論や社会科学などの学問分野で議論されてきたコミュニティ観との比較を通じて，ヴァーチャル・コミュニティをめぐる言説の変容について明らかにしてきた。

この変容を要約すれば，新たなテクノロジーが可能にしたヴァーチャル・コミュニティの出現ははじめ，オフラインでは失われてしまったコミュニティの代替，もしくはそれ以上のものになるとして歓迎されたが，しかし，その期待は次第に薄まり，ヴァーチャル・コミュニティはいまや，せいぜい日常における人間関係を補完するツールと考えられるようになったということである。

本稿ではヴァーチャル・コミュニティの変容を，アーレントの権力の概念から考察した。アーレントの権力概念は，暴力とは鋭く対立するものであり，複数の人びとのあいだに現われ，人びとを相互に結びつけるものであった。それゆえわれわれは，原理的に物理的な暴力が不可能であるヴァーチャル・スペースにおいて，もっとも「純粋な」形においてこの権力が存在しえたと考え，そしてヴァーチャル・コミュニティの変容を人びとのあいだに創設された権力が衰退したことに求めたのである。

われわれは，この衰退した権力が再生し，ヴァーチャル・コミュニティが再び人びとを有機的に結びつける場になることを期待できるだろうか。あるいはいまや，テンニエスのいうゲマインシャフト的な共同体へのノスタルジーから脱却し，新たな共同体の概念を練り上げるときなのだろうか。この問いに応えることは容易ではないが，少なくともわれわれが言い得ることは，本稿におけるヴァーチャル・コミュニティの分析によって，これまであまり顧慮されることのなかったアーレントの権力概念を，その生き生きとした様相において把握できたように，このヴァーチャルなコミュニティという極めて今日的な現象は，政治理論にとって今後も重要な関心事であり続けるだろうということである。

注

(1) インターネットにおける匿名性にはもちろん，利点のみならず，欠点も存在し，それが孕んでいる問題性についてはすでに数多く指摘がなされているが，たとえば，パトリシア・ウォレスの『インターネットの心理学』（ＮＴＴ出版，2002）を参照。

参考文献

[1] Hobsbawm, E.: The Age of Extremes: The Short Twentieth Century, 1914-1991. London: Abucus Book, p. 428, (1997).（河合秀和訳:『20世紀の歴史—極端な時代　(下)』, 三省堂, 2005, 209頁.）

[2] Bauman, Zygmunt: Community: Seeking Safety in an Insecure World, Cambridge: Polity Press, p. 3,(2001).（奥井智之訳：『コミュニティ—安全と自由の戦場』, 筑摩書房, 2008, 10頁.）

[3] Rheingold, Howard: The Virtual Community: Homesteading on the Electronic Frontier, revised edition, Cambridge: The MIT Press, p. xx,(2000).

[4] デランティ，ジェラード：『コミュニティ—グローバル化と社会理論の変容』，山之内靖，伊藤茂訳，NTT 出版，45 頁,(2006).

[5] テンニエス，フェルディナント：『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト—純粋社会学の基本概念—』, 杉之原寿一訳, 理想社, 331 頁, (1954).

[6] Arendt, Hannah: "Philosophy and Politics," in Social Research, Volume 57-1, pp. 80-81,(1990: Spring).

[7] Arendt: The Human Condition, Anchor Books Edition, New York: Doubleday Anchor Books,(1959).（志水速雄訳：『人間の条件』, 筑摩書房, 2001.）

[8] Rawls, John: A Theory of Justice, Revised Edition, Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, p. 11,(2003).

[9] Sandel, Michael: Liberalism and the Limits of Justice, Cambridge: Cambridge University Press, p. 174,(1982).

[10] Macintyre, Alasdair: After Virtue: A Study in Moral Theory, Second Edition, Notre Dame: University of Notre Dame Press, p. 220,(1984).

[11] Rheingold, pp. xx-xxi.

[12] ハウベン，マイケル・ハウベン，ロンダ:『ネティズン—インターネット，ユースネットの歴史と社会的インパクト』，井上博樹・小林統訳，中央公論社，23-24 頁,(1997).

[13] http://homes.eff.org/~barlow/Declaration-Final.html（2008 年 1 月 31 日閲覧.）

[14] Wellman, Barry: "Physical Place and Cyberspace: The Rise of Personalized Networking," International Journal of Urban and Regional Research25,2,p.228,(2001).［http://www.chass.utoronto.ca/~wellman/publications/individualism/ijurr3a1.htm］（2008 年 1 月 31 日閲覧.）

[15] Graham, Gordon: the Internet:// :a philosophical inguiry, London: Routledge, p. 145,(1999).

[16] Burkhalter, Byron: "Reading Race Online: Discovering Racial Identity in Usenet Discussions," in Smith, M and Kollock P (ed.) : Communities in Cyberspace, London: Routledge, pp. 60-75,(1999).

[17] Smith, M and Kollock P: Communities in Cyberspace, p. 13.

[18] Calhoun, Craig: "Community without Propinquity Revisited: Communications Technology and the Transformation of the Urban Public Sphere, Sociological Inquiry," Vol. 68, No. 3, August, p.382,(1998).

[19] デランティ，253頁.

[20] Borgmann, Albert: "Is the Internet the Solution to the Problem of Community?," Feenberg, A. and Barney, D. (ed.) : Community in the Digital Age: Philosophy and Practice, Lanham: Rawman & Littlefield Publishers, Inc, pp.63-65, (2004).

[21] Arendt, The Human Condition, p.179.（邦訳 322-24頁.）

[22] Arendt: Crises of the Republic, A Harvest Book, New York: Harcourt Brace & Company, p. 155,(1972).（山田正行訳：『暴力について』，みすず書房，2002, 145頁.）

[23] ヴェーバー，マックス：『職業としての政治』，脇圭平訳，岩波文庫，18 頁,(2002).

[24] Habermas, Jürgen: Philosophisch- politische Profile, Frankfurt am Main: Suhrkamp, p. 246,(1991).（小牧治・村上隆夫訳，未来社，1999，348-49頁.）邦訳では，"Gewalt" は「強制力」と翻訳されているが，本稿では「暴力」と訳出した。

[25] Rheingold, p.1.

[26] ダイソン，エスター：『未来地球からのメール』，吉岡正晴訳，集英社，63 頁,(1998).

NII-Electronic Library Service